

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20002

研究課題名（和文）20世紀フランスにおけるラジオとテキストの相互性

研究課題名（英文）Interactivity between the 20th-century french radio and text

研究代表者

後藤 渡（Goto, Wataru）

早稲田大学・文学学術院・講師（任期付）

研究者番号：80961656

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：ラジオでの創作手法や主題がテキストの中に現れており、テキストでの創作手法や主題がラジオの中に現れていると仮定から、この研究課題は出発した。作家ジョルジュ・ペレックのテキストの中にメディア作品の痕跡が存在し、それらの痕跡が創作の主題に大きくかかわっていることを詳らかにした点を具体的な成果である。そしてペレックが制作したラジオ番組の中には、テキストで示された創作の主題（喪と可能世界）が隠されていることも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の学術的意義は、1960年代から70年代にかけてのフランスの作家たちがテキストの上での創作活動のみで活動していたわけではないという前提のもと、メディア創作とテキスト上での創作の相互性を詳らかにした点にある。加えて、ラジオでの創作を扱うという姿勢はフランスでもあまり進んでいない作家たちのラジオ研究の一助となるものである。そして、テキストとメディアを互いに独立して関係のないものと扱わない手法は、純粋なテキスト研究やメディア研究の枠に作家の活動をとどめないものであり、その点にも学術的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The research project originated from the assumption that creative techniques and themes in radio appear in the text, and conversely, creative techniques and themes in the text appear in radio. A result is the demonstration of the presence of traces of media works within the texts of Georges Perec, and how these traces are closely related to the themes of creation. Furthermore, it was also revealed that within radio programs created by Perec, themes of creation indicated in the text (such as loss and possible worlds) are also concealed.

研究分野：フランス文学

キーワード：ジョルジュ・ペレック フランス文学 ラジオ メディア

1. 研究開始当初の背景

メディアと文学という観点のもと様々な分野で研究が行われるようになって久しい。アンドレ・バザン『映画とは何か』(1958-1962)の一連の論考からリンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』(2006)まで連綿と続く文学作品とメディアの関りについての研究(特に「翻案」研究)は文学研究の一ジャンルを築いているといっても過言ではない。そして近年、小川公代編『文学とアダプテーション』(2017)、波戸岡景太『映画原作派のためのアダプテーション入門:フィッツジェラルドからピンチョンまで』(2017)、岩田和男編『アダプテーションとは何か』(2017)といった論集は小説と映画の越境についての論考は一種の流行をあらわしている。バザンが先鞭をつけ、ジャン＝マリー・クレール『文学と映画』(1993)、ジャン・クレデル、ローラン・ジュイエ『翻案を分析する—テキストからスクリーンへ』(2017)といった研究が定期的に出版されるフランスでも、先の論集や著作の多くがメディアへの「翻案」については視覚芸術を例にしておき、鳥羽耕史編『安部公房メディアの越境者(メディアとパフォーマンスの20世紀)』(2013)のラジオドラマについての論考やピエール＝マリー・エロン編『ヌーヴォーロマンにおけるラジオの冒険』(2017)を除けば、聴覚芸術とも形容できるラジオと小説の創作や両ジャンルの越境について十分な研究が存在しなかった。

そこで20世紀のフランスでの作家の創作においてラジオがどの程度痕跡を残しているのかという問いが生まれた。千葉文夫『ファントマ幻想』(1998)で既に指摘されているように30年代にロベール・デスノスがラジオドラマを制作した事実や、戦中、エンジニアであり作曲家でもあったピエール・シェフェールによる地下放送のために作られた抵抗詩が電波に乗って届くものであった点からも、第一次世界大戦後から第二次世界大戦中にかけてラジオは前衛と呼ばれた詩人や作家たちの創作の場であったといえる。翻って、大戦後、特に1960、1970年代のフランスのラジオでの作家の活動はどのようなものだったのだろうかを問うという動機から本課題は出発した。

2. 研究の目的

ラジオという場から60年代から70年代の初頭までのフランス文学の流れをとらえなおすのが本研究の目的であり、本研究の独自性は作家のラジオドラマでの創作と音楽家(作曲家や演奏者)の関りに焦点を当てた点にあった。従来のラジオドラマ研究においては作家のみに焦点を当てたものが多く、フランスで出版されたイザベル・コール編『ラジオ的書法』(1997)や先に挙げたヌーヴォーロマンを巡る論集の多くが作家に焦点を当てたものであった。しかし、メディア作品の特性、作家も製作スタッフである点を鑑み、スタッフの一員である音楽家のラジオ作品への影響は否定できないだろう。本研究では、まず、生活音をミキシングして作曲した具象音楽の作曲家ピエール・シェフェールの衣鉢を継いだとされていた教え子たちに着目した。なぜ彼らなのか。彼らは当時の作家たちとラジオドラマで多く仕事をしたからである。そして、彼らと仕事をした幾人かの作家のテキストにはラジオから音という要素や具象音楽の手法を取り入れたような描写が散見される。これらの要素に鑑みて、従来の研究のようなテキストからメディア作品という流れとは全く逆の流れを仮定し、ラジオでの作家たちの試み、すなわちラジオによる文学の領域拡大について、作曲家たちとの関係を軸に明らかにしていく目的もあった。

本研究課題では、ラジオという場から60年代から70年代初めのフランス文学を概観しようという目的のもと、①前提となるラジオという場について、②作家と音楽家によるラジオドラマの分析、③ラジオからテキストへの影響、この三点について、音楽家たちとのかかわりと、ジャン・チボードーとジョルジュ・ペレックという2人の作家を中心に分析しながら、ラジオでの創作を機に、音が作家たちにテキストの上での現実を表す指標となったことを明らかにしようとしたが、本課題を研究していくうちに若干の変化が生まれた。それについては後述の「研究成果」の欄にある通りである。

3. 研究の方法

60年代のラジオという場について考えるためには、戦後のラジオの歴史を参照する必要がある。ラジオフランスの曲の一つであるフランスキュルチュールの歴史を紐解いたエルヴェ・グレヴァック『千変万化のフランスキュルチュール』を参照すると、戦後、ラジオフランスの形成に大きくかかわったのはシェフェールが主導した「音楽探求集団」ということが明らかになり、シェフェールたちによってフランスの戦後ラジオ文化が醸成され、シェフェールのグループにとってラジオは実験の場であったといえる。日本で取り上げられていない文化史的な側面を概観しようとした。そのために40年代から60年代にかけて書かれたシェフェールの具象音楽に関する書籍とエヴリーヌ・ガイユ『音楽探求集団』を参照した。具体的に行ったことの一例として、シェフェールや当時のラジオ業界とのかかわりを調査するために、2023年3月の出張では、国立図書館オペラ分館にてペレックとラジオで共作をした作曲家フィリップ・ドロゴズの所属していたグループ(GMR)についての資料調査を行った。

作家たちと作曲家たちのラジオドラマ制作における交流については、60年代初頭と60年代

終わりに分け、チボードとペレックをそれぞれの時代に対応させ、チボードと音響効果士ジョーノ・エルによる『サッカー国際試合のルポ』(1960)から 60 年代半ばまでの作品とペレックとドロゴズによる『機械』(1968)から『一日』(1972)までの作品といったラジオでの創作を分析の対象とする。音楽家が生活音を取り入れ、劇場で上演される演劇とは異なる電波の上での演劇が、ペレックの言葉をかりれば、生活音により「現実風」の演劇に変わった。「現実」風の音が入り込むラジオドラマという場で作家自身が直接編集することのない音を彼らがどのように捉えていたかを書簡やインタビューから読み解き、ラジオ制作の中に作家たちの「現実」への志向があったことを明らかにしようとした。仮説を証明するために、2023 年 3 月と 6 月の出張で、ペレック協会やフランス国立図書館での手稿やタイプ稿の調査を行った。

こうした音による「現実」への志向は、本研究で扱うラジオ作品の後のテキストで、音による現実の召喚という形であらわれており、チボード『王家の祭典』(1961)やペレック『パリのある場所を書き尽くす試み』(1975)にもあらわれており、ラジオでの経験がフィクションの中の現実らしさを担保する音としてあらわれている点を詳らかにした。この点については、作品の読解とフランス国立図書館での調査を行った。

4. 研究成果

研究の成果としては、まず本研究の前提となる 1960 年代、70 年代のラジオを考える上でカギとなる要素の一つとなるはずだった作曲家の交友関係について、調査の中で、先行研究ではドロゴズはシェフェールと同じグループとされていた。しかし、ドロゴズの共作者でもあり、ペレックとも一緒に仕事をしていたウジェーヌ・キュフラーの証言によれば、直接的な関係はないということが明らかになった。そのため、背景については具体的な交友関係を詳らかにせず、時代としての大きな背景のみを扱うという若干の変更を行った。

加えて、チボードの手稿やタイプ稿が国立図書館に所蔵されておらず、テキストの読解以上のこと、テキストの生成にまで立ち入れなかったのは忤怩たることである。しかし、ペレックについては、ジョルジュ・ペレック協会の協力もあり手稿やタイプ稿を閲覧することができた。加えて、本研究課題が採択された前後で、50 年近く未刊行のままだった手稿群『場所』が刊行され、自伝的な事実や、手稿に書かれていたイニシアルが誰であるかも判明し、手稿の判読や背景の理解も容易になった。

しかし、フランスでのラジオ制作以前にペレックがドイツで行っていたヘールシュピール(ラジオドラマ)もフランスでのラジオ制作において重要であるため、共同制作者のオイゲン・ヘルムレとのドイツ語訳の書簡を参照したが、研究者のドイツ語能力の問題により、企画されているフランス語版の出版が待たれる。上記のように、ペレックのフランスでのラジオ演劇については、それ以前のドイツでのラジオ活動を参照できなかった点に不満は残るが、ラジオドラマのドイツ語版そのものは参照することができた。参照の結果、ドイツ語話者でなくとも効果音で背景を理解可能な構成や多言語で構成されている作品制作を作家が行っていることが明らかになった。より具体的な例を示すと、ペレックはドイツ語を言語ではなく音として扱う、背景の音と等価で扱うなど、生粋のドイツ語話者ではないがドイツ語はある程度理解する外国人としてドイツで制作を行っていたことが明らかになった。この点が外国語での制作と母語であるフランス語の制作の間にある溝を明らかにするものであることも明らかになった。上記が第一の目的と第二の目的の成果である。

第三の目的である現実への指標については『パリのある場所を書き尽くす試み』や『マビヨンの交差点で見たものを書く試み』といった 1970 年代後半のテキストやラジオ番組を参照し、ラジオ番組とテキスト共に、音が「現実」を示すレフェランスとして効果的に取り入れられている点を確認した。そのうえで、別の「現実」、すなわち可能的な生についての志向もラジオの中に隠されていることを明らかにした。ペレックのラジオでの活動はラジオドラマだけではなく、音声による詞華集の制作もおこなっていた。それが 1976 年にラジオフランスで放送された『途絶えざる詩』である。音声の詞華集とも形容できるこの作品について、以前から分析を続けていたが、ジャック・ルーボーによる和歌の引用(再解釈)をペレックが引用した部分に着目した。この和歌からの引用の引用、自身を他人に仮託する二重の本歌取りと呼べる行為の中で、ルーボーに対する本歌取りに着目した。ルーボーの可能的な生を名前の変奏とともに列挙していく『JR』で、可能的な生の中でペレックがルーボーに自身を重ね合わせていることを明らかにした。こうした本歌取りはほんの一例であり、テキストや可能的な生の中を伝えるための技術が、ラジオからテキストに移ったともいえる。そして、テキストからラジオへの本歌取りの技術の以降も存在しており、ペレックの創作において、テキストとメディア作品を相互的なもので、なおかつ等価なものでもあるということを示した。上記の成果として、2023 年 6 月にウリボ(潜在文学工房)研究者が主催する研究会(パリ、国立図書館アルスナル館)で行った発表 *Une aventure radiophonique de Georges Perec : Poésie ininterrompue comme réserve et miroir* がある。

上記の 3 つの成果の他に、本課題の助成によってジョルジュ・ペレック協会や国立図書館リシュリユー館での調査で、ラジオだけではなくペレックのメディア作品での脚本作成の調査に取り掛かることもできた。ペレックも脚本に携わったとされる 1976 年 5 月フランス 3 で放送されたテレビ映画『他人の視線』を調査の対象とし、雑誌、新聞の切り抜きをみるためにフランス国立図書館リシュリユー館の視覚芸術閲覧室へ。ヒッチコック作品に想を得た作品の中で、主人公を脅かす影に 60 年代終わりの作家の恋敵をキャストした点にペレックの意思が見え隠

れていた事実が明らかになった。脚本の制作について 1975 年の手帳を参照したものの言及がなかったものの、恋敵の作家の資料が IMEC(現代出版資料研究所)に所蔵されているので、それらの資料を参照するのが今後の課題である。

本研究課題の発展としては、『場所』の刊行により、パリでの研究調査中に閲覧した手稿、ドキュメンタリー、『場所』と同時期に書かれていた作品の再解釈も可能になった。例えば、ペレックの死後に作られた友人たちの証言を集めたドキュメンタリー『ガスパール・ヴィンクレールをあなたたちは覚えていますか?』とその公開時に作られたカトリーヌ・ビネによるパンフレット、テレビドキュメンタリー『エリス島物語』をペレックと共作したロベール・ボベールが作家の死後に制作したドキュメンタリー『ヴィラン通りへの帰還』での証言は、『場所』、手稿、タイプ稿を参照したうえで、作品の再解釈の手がかりともなるだろう。こうした再解釈は本研究課題の研究機関終了後も行っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 後藤渡	4. 巻 121
2. 論文標題 ジョルジュ・ペレックの創作における固有名と映画：有契性、投影、憧れ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フランス語フランス文学研究	6. 最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/el1f.121.0_69	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 Wataru GOTO	4. 巻 10
2. 論文標題 De la memoire collective a la memoire prehumaine dans l'espace commun de La Vie mode d'emploi : la porte et l'ascenseur	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Wataru GOTO
2. 発表標題 Une aventure radiophonique de Georges Perec : Poesie ininterrompue comme reserve et miroir
3. 学会等名 Formes, Contraintes et Potentialites
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------